
食いたい時、飲みたい時

灘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食いたい時、飲みたい時

【Nコード】

N1834S

【作者名】

灘

【あらすじ】

あの伝説的ジャンプ人気野球ギャグ漫画だったMr. FULLS WING!の二次小説です

オリキャラを加えてミスフル達のキャラが変なギャグ連発!?する予定・・・。

面白くないかもしれませんが、開いた後にはもう遅いのです。

「オラアアア~~~~冷かしならけえれ~~~~!!!!」

まず最初に

えーまず最初に（タイトルと同じですが）

これは、あのジャンプ人気漫画だった『M r . F U L L S W I N G』略してミスフルの二次小説です

更新速度は遅いと思いますが、宜しくお願いします！

もう一度いいますが、開いて読んで、面白くないとか思ってももう遅いですから！ハイ。

あなたはもうこの中から抜け出せませんか！

ちなみに自分の好きなキャラは猪里と由太郎です。あ、あと子津ツチューも好きですね、ハイ。

普段はコメディーやシリアスしか書かない自分ですが、今回は珍しく恋愛の要素も入れたと思います

あ、でも基本はコメディーですから！比率で言うなら7…3ですか
ら！

そんなオリキャラの名前を紹介します！

『白雪^{しらゆき}凛^{りん}』

です！ぶっちゃけ名前だけだと男やら女やら……

まあ、一応女の子の設定にします

ん？勝手、気まぐれだって？そんなの…ミスフルの作者に言え！！

それでは次回からお話スタートです！宜しくお願いします！！

あと、オリキャラのプロフィールもまた今度載せようと思います

まず最初に（後書き）

次回も宜しくお願いします！！

感想、などお待ちしております！！

1 発目 漢娘と不思議少女と和風女（前書き）

今回から『食いたい時、飲みたい時』の第一話の始まりです！

大体小説の題名何なんだって話ですからねコレ。

あとこの物語は主人公…猿野天国が無事、入部試験を合格し、初日の部活の日からです

それでは！始まりです！！

1 発目 漢娘と不思議少女と和風女

「いやゝ試験の時の俺は輝いていましたなゝ何かもうメジャー級ぐらい」

と言ったのは我等の変態主人公・猿野天国。さるのあまくに

「おいおいうぬぼれるのもイイ加減にしろよ」

などと言い、猿野に話しかけたのは、沢松健吾。さわまつ けんご

先日した十二支高校野球部の入部試験の際に凄腕ピッチャー犬飼から特大ホームランを打った天国は非常に調子に乗っていた

「あゝ次はどの部に入ろっかなゝ」

「え!?! もう辞めんのか野球部!?! 今日が初日だろ!?!」

そんな会話を繰り返しながら、二人は下駄箱を出た

「冗談はさておき、マジな話風ちゃんとはドコまでいったんのよ

・A・は言ったんかそれとも・B・まで言っちゃったのかんゝゝゝゝ?」

風とは天国の好きな人のことで眼鏡をかけたおとなしい女の子である

「ホッホッホそうですね」 Ω（オメガ）までは言ってるかな俺達」

「えっ!？」

「それどんな行為まで及んでんの!？」

そんなエロトークを繰り広げる二人はバレエ部と思われる部室の前を通った

すると女子達は女の子特有の着替え時の会話を繰り広げていた

これを聞いた変態二人はこっそりと着替えを覗こうとした

しかし天国には好きな人がいるため遠慮するように沢松は進める

「まったく沢松くんとはのぞきなんて、いつまでそんな消極的な方法に甘んじてるつもりかね」

「あゝ？」

天国の余裕ぶっこいた言葉にむかつき、沢松は文句を言おうと振り向いた

「!」

しかしそこには学ランの天国ではなく、変態じみた服を着た天国がいた

「これからは”見る”じゃなくてなんかもう”見せる”の時代到来ですよ

見るんじゃないくてむしろ見せていけ積極的に」

「え~~~~~!?!?!」

沢松が叫ぶと天国は叫びながら部屋の中へ突っ込んでいった

「うお~~~~おねえさま~~~~~!!!」

「ちょ天国!」

部屋の中では、女の子達が叫んでいた

すると、さっきまで騒がしかった部屋の中が急に静かになった

「…静かになった?…」

そして、部屋のドアが開き中から出てきたのは

「さ…さわまつ…今度はまちがいなく殺^やられる…」

ボロボロになった天国と様々な危険な武器をもった着替え中の女の子達だった

「こっちに逃げてくんなく!!俺まで処刑される~~~~~!!!」

沢松と天国は一緒になって逃げ出したすると後ろから呼び止める声
がする

「止まるのじゃその二人。止まらねば……」

「え!？」

「ぶち殺す」

ドガッ!!!

天国は思いっきりバットで打たれた

口から血を出し倒れた天国に駆け寄る沢松。すると

「もう一発」

ドガッ!!!

天国はもう一回バットで打たれた

「まったく、女子達おなごの悲鳴を聞きつけてみれば……

そなた達か？最近多発で覗きやからをしている輩は……」

天国を瀕死にさせる程バットで強く打った女子は天国達に近寄りながら話しかけた

「女の敵め、こうなれば覗かれた女子達おなごの弔い合戦じゃ」

>i21300—2458<

天国をバットで思いっきり打った女子は、セーラー服のリボンはず青い袖なしの着物をセーラー服の上に着ている銀髪横ポニーテールの美少女だった

「おいどうしたんだよ凜〜」

「急に走り出して疲れた…かも…」

「もみじ！^{もみぢ}！檜！」

もみじと呼ばれた女性は体操服姿のショートヘアーの巨乳美人

檜と呼ばれた女性はジャージ姿で猫の縫いぐるみを抱えているおとなしそうな女の子

「いや、こやつらが覗きをしていたのでな…成敗してやったのじゃ」

「覗き!?!」

その言葉に目を開かせて反応するもみじ

すると、もみじの巨乳に目が行き失礼な言葉を発する天国

それを聞いたもみじは顔を赤らめながら指をパキポキと鳴らし出す

「俺が嫌いなのはデレデレしているナヨナヨのスケベ男だ…」

「おとし漢蹴り！！！」

「あばあ！！！」

もみじの強烈な蹴りが天国を攻撃した

「うわぁー綺麗に…決まった…」

「漢飛び蹴り！」

漢連弾！

漢アツパー！」

「おぶう！！！」

もみじは続けて天国に容赦なく攻撃をした

「容赦ねえ……！！（空中コンボ！？）」

そして、もみじの攻撃すべてが終わった頃には天国はすでに血塗れだった

「これにこりたら二度とハレンチな行為すんじゃないぞ 押忍おす
行こ凜、檜」

「うん…かも…」

「さすがもみじじゃな」

少女達はそう言うところかへ行った

「天国を秒殺…なんて女達だ…」

ちゃっかり無事の沢松

そしていよいよ一年生の初の部活

一年生全員ワクワクで部活に臨もうと部室に入るとそこには瀕死の天国がいた

その後一年生で会話を繰り返していたら野球部の部室の前から天国の大好きな人『凧』の声が聞こえた

「凧さん！」

天国はウキウキで部室のドアを開けたすると部室の前には大好きな凧…とさっきの暴力女二人とおとなしい女の子がいた

「なっ凧さん！この女性達とはどーいう間がらで!？」

「おい凧！なぜこの変態が野球部の部室から出てきたのじゃ!!！」

二人に一斉に聞かれ、よく分からない凧

「凧の説明終了」

「この変態が新入部員!？」

「このお姉たま方が女子マネージャー!?」

「ハイ、同じ一年の『清熊もみじ』さんと『猫湖檜』さんに…
『白雪凜』さんです」

「でこちらが、猿野天国さんです」

「ずえゝゝゝたい認めぬぞこんな変態! 入部も存在も!
こんなのが十二支^{ウチ}に入ってはそれこそ泥を塗ることになる! なあ
もみじ!」

「そうだ! 凜の言うとおりでぜ! ホラ檜も何かいってやんな」

「……………」キモイ……………」かも……………」

「!……………」(ガ~~~~ン)」

すごく落ち込む天国

「サルノアマクニがどんな人物か…タロットで占ってみるといい…
かも…」

「それは良い。檜のタロットは百発百中じゃからな」

「出ま…した…ネコ神さまからの御神託たまわり…ます…」

すると檜は猫のぬいぐるみをもって腹話術らしきことをする

「スレングスの逆位置だにゃー」

大変自分勝手な人間故”周囲の人間に害をなす”にやー
恋愛は結論を急ぎすぎて”失敗・挫折”
根気がなくて仕事が続かない”協調性が孤立する”にやー
力の悪用”エネルギーの無駄遣い”」

「とにかく最悪の人間だにやー以上ネコ神さまからのありがた〜い
御神託で…した…」

「……………（プルプル）」

それを聞いた天国は怒りだす

「もろ口パクじゃねーか！自分の意志100%だろーがこの不思議
少女…！」

「不思議なのはお前の頭の中にやー」 …同一
「そうですねネコ神さま」 …人物

「やっぱ占い当たっているではないか最悪じゃなコイツ。凧も氣を
つけるんじゃないぞ」

「ちがうんです！学校の伝説だって…」

「もういいよ凧、俺はもう行くぞ」

そう言うともみじは部室の横においてあった箱をもつ

「待ってもみじちゃんその箱は駄目！中にはホーガンの球が…」

「もみじ氣をつけた方がいい…かも…事故の暗示がでてる…」

タロットを見ながら言う檜。それを聞いてももみじは大丈夫と運び始めようとした

しかし、次の瞬間箱がぐらつきもみじ達の後ろにいた凧と檜にホーガンの球が落ちそうになる

「！凧！檜！」

凧は走って駆け寄るが間に合いそうにない

二人は「落ちた」そう思いグッと目を瞑る。しかし

いつまでたってもホーガンの球が落ちてこないの二人はおそろおそろ目を開ける

「！？」

凧と檜の目の前にはホーガンの重い球すべてを顔や肩や手で二人を護った天国がいた

「猿野くん、どうしたんすか急がないと先輩方きちゃいますよー
グラウンド整備しにいかないとー」

すると向こうから天国と同じ一年の野球部員・子津が天国を呼んだ

「おお…舗装したるわコンクリで…」

天国はよろめきながら子津達のもとへ向かい始める

「ちよちよつとまで…」

もみじは自分天国を呼び止める

「オイったら！」

「今確かに顔にホーガン…が…」

もみじと檜が天国に声をかけるが、天国は何も言わずに子津達のもとへ向かった

うろたえるもみじと檜に風が声をかける

「あの人ですよ…十二支に伝わる時計の伝説を二度破ったのは…」

「ええっ!?!」

「し…信じられっかよ俺は信じねえ!! なっとなあ檜、あんな変態がよおー」

「一概にそうとも言えない…かも…」

「何!?!」

「ストレンジが持つ本来の意味…は――

そういいながら檜は先程天国の占いをしたタロットを見る

『強い意志

そして無限の可能性』

「オイ、お前——猿野天国とか言ったな……」

「!……」

天国は凜の横を通る時話しかけられた

凜は凪達と数メートル離れているので凪達に声は聞こえない

「二人を…助けてくれたこと…一応礼を言っておくぞ……」

「…当たり前のことをしたまでツスよ…」

そう言うと天国はまたよろけながら子津達のもとへ行った

「…ふん…ただの変態と思っていたが…少しは骨のある奴のようじゃな…」

1 発目 漢娘と不思議少女と和風女（後書き）

一話終わりです！

いやー原作の通りにやるのって…大変だ…

では長々とありがとうございます！感想待っております！

それと、オリキャラの凜の絵を載せてますが…

下手くそなのは言わなくても分かっていますから！

それと、原作の十二支の制服の色を一生懸命だそうとしましたがちよつと無理ッぽかったので、勘弁してください

2 発目 野球”Love”主将(前書き)

えーまず上の題名の「主将」とはしゅしゅうと読まず「キャプテン」と読みますお間違いない

2 発目 野球”Love”主将

十二支野球部一年生は、先輩達が来る前にグラウンドを整備しておかなくてはならない

そこで主人公、猿野天国さるのあまくになどもグラウンドのトンぼかけをしていた
しかし天国はふざけてばかりでとんぼに集中していないのを子津は
ツツコミしながら注意していた

そこで子津はふと前を見るととてもトンボかけが上手い人を見つけたので天国にもあの人を見習うようにと進めた

しかし天国はそんなことはせずその人に近づくと上から目線で話始めた

「ホッホッホ君は新入り君かね

試験の時は見かけなかったがこの部活は今日が
始めてかね」

天国のそんな言葉を無視してその人はもくもくとトンボかけを続けた
が、天国はそんな事は気にせずに話を続ける

「いや失敬失敬私はこの野球部の次期主将とも名高いロマンの人、

猿野天国。

こうして二人が出会えたのも何かの縁だ」

そう言うとき天国は鼻をほじりながら

「ちょっと『チェリオ』買ってきてえ」

天国は実に上から目線で言った

それを聞いた瞬間その人は若干怒っているように見えた

そうしていると先輩達がやってきた

一年生達は緊張しながらも先輩達に挨拶をする

子津も誰が主将かなど考えていた

「アレ？ キャプテンまたトンボかけしてるんツスカ？」

「んなもん一年に任せりゃいいのに」

「いやいいんだ、グラウンドは僕の大事な恋人だからね」

と言ったのは先程天国がパリシ呼ばわりした人だった

それを聞いた瞬間天国の目にはその人の周りにキャプテンオーラが

あるのが見えた

「ハア〜なんていうか本当、心底野球愛しちゃってるって言うか…」

〔単なる潔癖症だろ…〕

〔ガンコ親父のラーメン屋みたいな…〕

子津と天国はこの世の終わりのように落ち込む

〔なんて馴れ馴れしい言い方してしまったんだあもうおしまいッス〜〕

〔俺なんてパシリ呼ばわりだぜ…〕

それを見た主将はキラキラした笑顔で二人で話しかけた

「ん？何を固まっているんだい二人共、さっきのことなら気にしてないよ」

そこまで言うときャプテンは目を光らせ天国を見る

「『チェリオ』くん」

〔絶対根にもってるこの人…!!…〕

そして、グラウンド整備が終わり一年生は整列するように言う

「僕が十二支高校・主将キャプテンの牛尾御門うしお みかどだ野球はLoveラブだ
まずは諸君野球を愛せそれからだ」

そしてその後、一年に自己紹介を言うように言う

「出身校・ポジション・それと趣味、性別、国籍、取得資格、賞罰
そして『好きな子の名前』を言
つてくれ」

〔修学旅行の夜みたいだな…っーか細か!〕

一年生全員心の中で突っ込んだ

そして、自己紹介が始まった

「兎丸とまる 比乃ひの！山白中出身ですポジションはセカンドでした♪趣味
はゲームをすることです？」

兎丸は高校生にしてはとても小さく見た目も高校生には見えないの
だがとても足が速く天国からは『スバガキ』（すばしっこいがきの
略）と呼ばれている

「辰羅川たつがわら 信二しんじと申します神盟中出身のソフト部にてキャッチャー
を務めていました、趣味は読書ですかね」

辰羅川は見た目インテリ系で丸眼鏡にモミアゲが特徴の男だ

「犬飼いぬかい 冥めい。神盟中出身、ポジションはピッチャーを…趣味は…（
うーん）

……自分探し……」

犬飼はボソツとテレながら言った。それを聞いた天国は吹きだし笑い始める

「自分探しですって」『傷心したOL』じゃないんだから」

それを聞くと犬飼は不機嫌顔で趣味に付け加える

「他にもありました、『猿狩り』、『猿イジメ』。」

犬飼は色黒のイケメン顔のでかい男。天国とは仲が悪い、モテるのに女の子が苦手と言う非常に残念な人である

続いて、牛尾が書類を見ながら名前を呼ぶ

「しば あおい司馬葵……」

しかし反応がない。すると兎丸が司馬の横に行き変わりに自己紹介をする

「主将——司馬くんは柑田中出身ショートをやってたそうです
♪趣味は音楽鑑賞とネットです」

司馬は常にサングラスをかけている無口な少年だ

兎丸が言った後牛尾は笑顔で言う

「そうか、司馬くんはちょっとぴり恥ずかしがりやさんなんだね
みんなの前でお話するのが苦手なのかな？」

そう言うと牛尾は方向を変え全員に言う

「それじゃこれからはちよつとづつ部員のお友達とお話できるように頑張ろう」

みんな司馬くんを無視しないように」

~~~~~ここは幼稚園か……~~~~~

「<sup>ねず</sup>子津 <sup>ちゅうのすけ</sup>忠之介っす！候陽中出身でピッチャーをやってましたっす！趣味は他にありませんっす！野球一筋っす！」

子津は話の最後に「ゝっす」とつけるヘアバンドをまいているそばかすの男の子

次はどうとう天国のばんがきて天国は余裕と言わんばかりの顔で待った

しかし、牛尾はあえて天国をスルーし話を続けた

そして一年生の中に『十二支に伝わる村中選手の時計の伝説』を破ったものがあるという話をする

その瞬間天国は目を光らせ大きな声で自己紹介を始めた

「はい！！それはこのわたくし、猿野天国でございます！！」

王野中出身、守備範囲は『6歳から44歳』！特技はモノマネでネコのゲロするモノマネと犬飼のモノマネが得意です！！

今までやった一番の悪はピンポンダッシュと脱税！  
趣味は『ヒモなしバンジー』と『カツアゲの観戦』！  
好きなアイドルは『モーニング娘』とくに好きなユニットはプッチモニとミニモニ！…」

それを聞いた瞬間牛尾は苦笑いしながらでも本当にびっくりしたと言う顔で言う

「まさか君が伝説をね…さっきは失礼したこれはVIP待遇しないといけないな」

天国はナハハハと笑いながら頭をかく

「じゃ伝説くん『チェリオ』買ってきて。部員全員分」

「え〜〜〜〜！?!?!」

先程のことをまだ根にもっていたのか牛尾は天国に黒いオーラを出しながら言った

そうして監督からのポジション別ランキングなどの話を終えて

十二支恒例の 校内競馬 というのをすることになった

二人一組のペアになり昇降口から屋上まで行き戻ってくるタイムを競うと言うものだ

そして、レースが始まり犬飼と辰羅川のペア、天国と子津のペアは

張り合いながらレースを競い途中天国が危ない橋を渡ったりしていた  
そしてとうとうゴール直前に二つのペアは横になりそのままゴール  
した

当然二つのペアは自分達が一着だと思いどちらが一着かと話し出す  
すると

「何言ってんDa<sup>ダ</sup>どっちも一着じゃねーYo<sup>ヨ</sup>」

「「!」」

4人は驚きいっせいに振り向く

するとそこにはバンダナの男と鼻の上に絆創膏を貼っている男とい  
かにも仏教そうな先輩3人が涼しい顔をしていた

「やっと着いたKa<sup>カ</sup>い一年坊主ども」

「他の一年はどうしたとよ?」

4人は先輩達はとっくにゴールしていたのかとうろたえる

これが中学と高校の差かと実感した

＊＊そして＊＊

「猿野さん大丈夫でしょうか……」

凧は水道でタオルを濡らしながら考えていた

「どうした凧。浮かない顔じゃな」

そこへ同じ一年マネージャーの凧が凧に声をかけた

「あ、いえ一年生の方達が次々と倒れてやってきているので……その……」

「…ふーん。凧は猿野<sup>あいつ</sup>が心配なのじゃな…」

「え？あいつ？？」

「いや、凧は知らなくて良いのじゃ」

そう言う凧は水道の水をキュと閉めて校舎の方へ向かう

「え、凧ちゃんどちらに？」

「決まっておるじゃろ、そんなに心配なら見に行けば良い話じゃホラ行くぞ凧。」

凧がそう言う凧はパアアと笑顔になり凧の後ろを着いていき始めた





## **2発目 野球”Love”主将（後書き）**

どんな終わり方？って話ですね、ハイでも次回に続きます頑張ります  
なので次回も宜しくお願いします！

感想、待っております

### 3 発目 剛と柔（前書き）

今回から毎回、あるコーナーをします!!

題して『野球くえすちよん! コーナー』です!!

まず、前書きで野球についてのクイズを出します!!

それで後書きでその答え等、解説をします!! それでは始まりです!!

ベースボール  
野球くえすちよん! コーナー

＊＊野球は何人でするスポーツ? ＊＊

### 3 発目 剛と柔

前回…校内競馬をし、天国達より早くついていた先輩達に驚きを隠せない全員であった

「ちよいとノロマちゃんじゃないNo?」  
こりやベラボーかつこ悪イZe」

バンダナをつけている変な喋り方の先輩は次に天国へ向けて話しかけてきた

「とくに伝説を破ったとかいう”モンキーベイバー”  
さっきの自己紹介とってもファンキーだったがYo」

そこまで言う先輩は余裕そうにフウと息をはくとまた口を開いた

「ルックスの方もほろ苦くねえKa?」

その言葉にブチッときた天国だが、一応先輩なので怒りは抑えた  
すると、そこでキャブテンがやってきて天国達のタイムを教え  
てくれた

天国達のタイムは 『12分48秒21』

ちなみに先輩達はこのタイムの半分でゴールしていたらしい

つまり、天国達が折り返しの地点にいる時にはすでに先輩達はゴールしていたという事だ

そして、残りの一年生も帰ってきて今度は全員がグラウンドへ向かう途中、一年生、子津などは先程の先輩のすごさを語っていた

セカンドレギュラーの猪里<sup>いのり</sup>。これは兎丸の希望ポジション  
(猪里は鼻の上に絆創膏をはっている福岡喋りの2年生)

遊撃手<sup>ショート</sup>のレギュラーは蛇神<sup>へびがみ</sup>。これは司馬の希望ポジション  
(蛇神は仏教、ていうかお寺の人っぽい古い感じの3年生)

子津はどちらも激戦が予想されると言った、そして続けて口を開く

「そして猿野くんが希望するポジションのレギュラーは……」

「ん？」

子津が話している最中に、天国は目の前にいるある人の存在に気付く

「風さん？」

そう、その人物とは猿野が恋心を抱いている、鳥居とりい 風なぎ。と第一話にして天国と秒殺してしまった白雪凜がいた

しかし天国は風の手がやけに不自然に前にあるなと思ひ不思議に思う

そして、よくよく見るとなんと風はあのバンダナの先輩に手を握られていた

「はわわわわわ！？ 風さんがっ！！ 風さんが~~~~~！！！」

突然のことにてんぱっている天国

そんな天国にも気付かずバンダナ先輩は風を口説き始めた

「オウマイプリティーガールなんて愛らしい

その玉のような白い肌、ベイビーみたいな手に力仕事は似合わないNe」

「はい？」

凧はよくわかってないようでキョトンとしている

「な、何なのじゃ。この変態先輩は……」

凧の横で凧は青くなって固まっている

そして、バンダナ先輩はしばらく凧をジッと見つめて、また口説く

「君のその、固く閉ざされた心ハートの扉ドア……

僕のキスの鍵キで開けてもいいかな……」

バンダナ先輩はそう言いながら手に持っている凧の手の甲にキスをした

”ゾワワワワワ……”

凧がこの瞬間全身に鳥肌が立ったのはいうまでもない

「な、おら……！！な、凧さんに何すんじゃこのしましまバンダナ……！！！！」

その行動についてブチぎれた天国はバンダナ先輩腕を泣きながら掴んだ

しかし、バンダナ先輩はそんな突然の出来事にも口笛を吹いて対応した

そしてバンダナ先輩は天国の腕をスルリと簡単にすり抜けて天国の背中回った

いきおいよくバンダナ先輩は天国の背中を足の膝でおし天国を地面にたたきつけた

「固いNa<sup>ナ</sup> 怪力くん…」

「グエー!!」

天国を突き倒すとバンダナ先輩は余裕そうに笑いながら天国に話しかけた

「どうしたい急に後ろから

ジェラシックボーヤはみつともないZe<sup>ゼ</sup>」

するとセカンドレギュラーの猪里がやってきてバンダナ先輩を叱った

「おい何ばしよーとや!？」

まーた女の子にちよっかい出しよったとね グラウンド集合ぜー」

「わり猪里、でもどうよ今のベラボーカッコEだRo<sup>ロ</sup>」

そう言いながらバンダナ先輩と猪里はグラウンドの方へ行った

そして、未だに地面にへばりついている天国はバンダナ先輩へ怒りを深める

「ぬぐぐ…あのキザ……」

そんな天国を見て凜はため息まじりに声をかける

「おいつまでそうしておるのじゃ”猿”。さっさと立たんかばか者」

凜はそう言いながら天国の背中を強く蹴った

「グエー!!」

「り、凜ちゃん！ 猿野さん大丈夫ですか!？」

心配した凼は天国に声をかける

「はぁゝ？あの愛しの凼さんが俺のことを気にかけて…痛いけど幸せ！痛いけど幸せ！」

そんな気持ち悪い顔をしている天国に凜は思い切りバットで殴った

そしてグラウンドに着き、ウォーミングアップ後本練習に入るとまず

ポジションごとに分かれて守備練習になる

しかし、天国は自分はバッティングの方で活躍すればいいと思っているので守備練習などただめんどくさいだけと思っていた



そんな風に余裕をかましていると突然バンダナ先輩が声をかけてきた  
天国は一瞬呼び捨てになりそうだったが一応先輩なので、後から先輩と付け足した

バンダナ先輩も天国と同じく余裕をかまして天国をからかっていた  
ので天国はバンダナ先輩の守備はどうだと聞いた

だがちょうど天国の守備の番がきたので話は一時中断となった

「ご指名だZe<sup>ゼ</sup>ベイバー  
伝説のフィールディング見せてくれYo<sup>ヨ</sup>」

バンダナ先輩はこれから守備をする天国をからかうように言った

「いやいやもー先輩ったら。（あとでギタギタにしたる）」

タハハと笑顔でとんでもないことを考えていた天国だった

内野の連携プレーは二塁手・三塁手・遊撃手がゴロをさばき

ファーストへと送球するまでが練習となっている

ファーストはなんと言っても補給能力が重要視される

どんな送球でも捕れることが必須条件となる

……と言った矢先に天国は捕れずに天国の急所へ直撃した

天国はその瞬間三途の川……の向こうで大蛇に巻きつかれているムツゴロウさんがいるのが見えたらしい

”ドサッ！”（↑天国の倒れる音）

「こ、こいつあ……まさかD○☆シロートちゃんかY○」

バンダナ先輩は悲惨な姿になった天国を見て呟く

「こいつはベラボーかつこ悪イZe」

ショートバウンドさばきは基本中の基本だZe」

そう言うバンダナ先輩、虎鉄は守備の方向へ行った

「見られるぜ……虎鉄の鉄壁補給技が……。」

ファーストの守備は比較的楽と言われている

それは多い右打者の強い打球はほとんどがサード・ショート方面に行くからだ

「ファースト！」

そういいながらゴロをとった部員が虎鉄へ送球する

しかしその送球は低く手前でバウンドしそうになる

が、虎鉄はその瞬間大きく足を広げバウンドする前にボールをキャッチした

「すげー開脚だ!!」 「体やわらけー!」

虎鉄はボールをとったままの状態で天国に話しかけた

「∴球がここまでこらえきれず 沈んじまいそうなら∴

『すくってやりや

あいい』」

天国はその瞬間何も言えなくなり「うゝ∴」と黙り込んでしまった

「ファーストの守備を軽視するヤローがいるが ありや間違いD<sub>ダ</sub>a」

虎鉄は立ち上がり天国の方を向いて話だした

「ピッチャーの精魂こめた球が打たれ、それを懸命の守備でキャッチした球D<sub>ダ</sub>a」

その時後ろから高い送球がきていた。

「そんな思いのこもった球……」

虎鉄はまったく送球を見ていないのでボールがきていることもわかっていないかもしれない

「おい！後ろから球きてんぞ！」      「しかも送球が高い！！！」

誰もがとれないと思った瞬間、虎鉄は天国の方を向いたままジャンプし、そのまま送球をキャッチした

そして空中にいるまま虎鉄は話の続きを話す

「最後の受け手があつてこそ、華<sup>はな</sup>があるってもんだR<sup>ロ</sup>O」

そう言うのと虎鉄は見事にベースの上に着地した

天国はその光景を見て、虎鉄は口だけの男じゃないと思った

そして守備が終わると全員で行う打撃練習のフリーバッティングとなった

天国は最初から守備は捨て、バッティングの方でかせごうと思っていたのでここでこそ虎鉄に一泡ふかせてやろうときばる

「オウこら来いや！！」    ネズツチュー”！！特大魂ぶちかましたるわ！！！」

「……ネズツチュー？……」

子津は不思議に思ったがあえて無視してボールを投げることにした  
二度も伝説を破った天国だが、忘れてはならない彼は野球シロート  
そして今まで打てた球はすべて……

『ストレート』……だと言うことを……。

天国はカーブやチェンジアップなど変化球にあっけなく全球空振りに終わった

そして、変化球も立派な野球の球なのに天国は打てなかったので球に文句を言った

そんな天国は無視して、次のバッター、虎鉄の番になった

虎鉄のフォームはとても力が入っていないさそうなゆらゆらしたフォームだった

キャッチャーをしている辰羅川はこんな体勢で対応できるのかと不安になった

しかし

虎鉄はカーブやその他変化球にいつも簡単に当て校舎の方まで遠くに飛ばした

「「「！！！」」」」

天国、子津、辰羅川は全員驚きを隠せなかった

そりやそうだ、打った本人は「Ohよく飛んだNa」などと呑気にいっているが

先程のかまえからあんだけ飛ばしたんだ、誰だって驚く

天国が怪力まかせの『剛のバッティング』だとすると……

虎鉄のバッティングはそれの対極『柔のバッティング』である。

ファーストレギュラー

虎鉄<sup>こてつ</sup>

大河<sup>たいが</sup>

。

### 3 発目 剛と柔（後書き）

本当に何から何まで原作どおりは難しいです…。

まあそれでは、コーナーいきます！！

野球くえすちょん！〈答え・解説〉

凜

「このコーナーでは私も解説に参加するぞ！」

灘

「そんなじゃ、答えと解説いきましょーか、凜ほいどーぞ」

凜

「野球は『9人』でやるスポーツじゃ。下がかくポジションの場所となっている」

灘

「見にくいと思いますけどすみません」

>123283—2458<

凜

「とまあこのようになっている、全員がいなければ野球は成立しな



いのじゃ」

灘

「ちなみに天国や虎鉄のポジションがファースト。  
兎丸や猪里のポジションがセカンド。  
蛇神と司馬のポジションがショートとなっています」

凜

「まだ言われていないが、牛尾<sup>キャプテン</sup>主将は実はサードなのじゃ」

灘

「そんなもって  
キャッチャー・ピッチャー・サード・ショート・セカンド・ファーストが内野で  
ライト・センター・レフトが外野となります」

凜

「それではまた次回も絶対に見るんじゃぞ！」

灘

「お願いします！」

## 4 発目 ゆかいな合宿（前書き）

なんか、ほんとに更新速度遅いなって思います……ハイ。

ま気をとりなおして…

ベースボール  
野球くえすちょん！コーナー

＊＊野球はどうやったら点が入る？＊＊

## 4 発目 ゆかいな合宿

銀髪の長い髪を横でポニーテールにして十二支野球部の部室の中でジャージに着替えていたのは白雪凜

凜は都合により少し遅れて部活に来て、たった今着替え終わった所だった

そして、部室を出ようとした時に机の上に乗っているある物に目がいった

凜はそれを手にとって見てみた

「…………野球部日誌…………？」

凜はそういえばそんな物あったなとふと思い出した

凜がなぜ日誌の存在がうすら覚えかと言うと日誌の管理は基本『できる人』が書いたり持つようになってる

なので基本野球部の日誌は凧が管理するようになっていたからだ  
凧はそれをパラパラとめくってみた  
中にはびっしりと野球部の毎日のことなどが書いてあった

凧はさすが凧、と関心しながら一番新しい部活の日誌を読んだ

新入部員さん達が十二支野球部に入部して、早くも二週間が立ちました

ピッチャーの犬飼さんは左の剛速球に磨きをかけ、

女房役を務める辰羅川さんも抜群の配給で犬飼さんをリードしてます

兎丸さんもバントの練習では足の速さで内野安打を狙っています

司馬さんのグラブさばきはいつでも目をみはります

子津さんも変化球にキレが見えてきました

みんなスクスク力をつけています

さて、猿野さんは……と言おうと……

今日もグラウンドに埋められていました……

たぶん何かの罰かと思います……

先輩方も一年生をはるかに凌ぐ練習量です  
今年の十二支はすごいチームになりそうです。

凜はそこまで読むとパタンと閉じて机の上に戻すとグラウンドの方  
へとかけていった

そして、その日部活が終わった後、監督…ひつじたぬうじん羊谷遊人は部員を集めて  
話をしていた

「よおー一年もだいぶ練習の方慣れてきたな」

羊谷がそう言うのと一年生は威勢の良い声で返事をする

「そこでだ、いつも同じ練習はつまんねーだろうからこれより始ま  
ゴールデウィークるG・Wは…

『合宿』なるものをドローンと決行しようと思う」

「合宿！?!?」

全員驚いて声を出したが一年生などは特に、入部試験の時があるのでまた裏があると全員疑いの言葉を出していた

すると羊谷はフウと笑いながらため息をつきながら言う

「なんだなんだ俺ってそんなに信用ねえのか

今回の合宿はいつも汗水流たらしめて頑張るお前等をねぎらうモンなんだぞ」

そんな言葉を聞いても全員しらけた顔をしたままだった

すると羊谷はホワイトボードにあるポスターをはりながら口を開いた

「行き先はここ、観光地として有名な……『伊豆』だ」

それを聞いた一同は驚きの声をあげる

「いっ伊豆だってよ!!」「マッマジか!?!山!海!」

そして一同の声が収まると羊谷は続けて言う

「今回の合宿は題して『ゆかいな合宿』だ  
伊豆はいいぞ山あり、川あり、料理はうまいし」

そこまで言うとは羊谷は目線を女子マネに変えにやけた顔で口を開く

「それと、水着を忘れんようにな。泳ぐぞ？女子マネもな」

それを聞いた瞬間、女子マネは全員顔が赤くなった  
しかし、それを聞くと凜は黒い笑顔で羊谷に話しかけた

「監督？後で少々お話がありますが……宜しいですよ？」

羊谷はそういわれると急にガクガクと震えだし怯えた声で答える

「お、おお……教頭からの呼び出しなんか断って聞きに行くわ……」

その光景を見て、部員は凜に一瞬怯えを持ったがすぐにまた妄想に  
入っていた

「…コッコホン！ってわけだ！明後日朝5時校門前集合！それじゃ  
解散！！」

「っしたあゝ！！！」

解散し終わった後は全員合宿の話ばかりだった

「伊豆だってよく監督もいいところあるな」

「やっぱ旅館とか泊まんのかな」

兎丸は小学生のようにはしゃぎながら牛尾や猪里などに話していた

そんな姿を見て、子津はすっかり修学旅行気分だなとふと思った

「H<sup>ハ</sup>aッハゝ一年は考えがピュアでいいN<sup>ネ</sup>e」

その声に天国と子津は反応し、振り向いた

「合宿<sup>ラバー</sup>と言えばやっぱ恋だR<sup>ロ</sup>o」

そこには柔軟体操をしていた虎鉄がいた

ラバーと聞いて卓球のアレと勘違いしないように。

すると虎鉄は柔軟体操を止めて立ち上がると続けて語りだした

「大自然と言う最高のロケーションで男と女が一つ屋根の下で共同生活するんだZ<sup>ゼ</sup>e

何か起きないわけないだR<sup>ロ</sup>o

山で見るステージはまるで“星クズのステージ”さどんなレディーも魔法にかかる

…恋の魔法<sup>マジック</sup>ってやつに凧と見る夜景、さぞかし美しいだろーN<sup>ナ</sup>a」

その言葉にとうとうカチンと着たのか、天国は無言で虎鉄の前に歩



いて行く

「凧さんは渡さんスよ」

「ほお、オメーが？ 脈でもあんのk<sup>カ</sup>a？」

二人はしばらく火花を散らしあっていたが虎鉄は余裕そうな顔で笑って喋った

「なんならこの合宿：凧とファーストレギュラー、<sup>ダブル</sup>Wで賭けてもいいZe？」

「上等、スよ、どっちもぜってえ渡さんスから」

（そんなこんなで）

それぞれの思いを胸に合宿の日はやってくる

合宿初日 AM 5:00

全員が集合して点呼がすみ次第第二台のバスに分乗して出発することになる

しかし、まだ天国が着てなく、子津は探しに行くと言いだした

羊谷はこれを機に猿野は『リストラ』などと言い出しはじめたりもした

（もう猿野くん、あんなに楽しみしてたじゃないすか寝坊でもしたんすか

まったく何処で道草くってるんすか……）

そう思いながら子津は天国を探しながらキョロキョロとあたりを見回した

「ムシヤムシヤいやゝ朝はやっぱりこれに限りますなゝ」

「いたー！ー！！！」

（ほんとに道草食ってるー！ー！！！！）

こうして遅れてきた天国も合流し十二支野球部は出発した

これから先目的地で待っていることも、知らずに……

「わーい司馬くん見て見て！！海が見えるよー！！！！」

あ、そうだ凧ちゃん達も一緒にゲームしようよー？

もみじちゃんもヒノキちゃんもりんちゃんもー」

兎丸はそう言いながら一年の女子マネの中に混ざりこんでいった

「ゲーム…面白そう…かも…」

「何のゲーム何ですか」

「桃鉄だよー♪」

「どうやってやるんじゃ？」

そんな姿を見て天国は兎丸へと怒りを見せていた

しかし、そんな天国の怒りをもっと広くするかのように虎鉄も参戦し始めた

「わー”ボンビー”ついたねりんちゃん」

「何じゃこの”猿野”みたいなのは」

「それは”貧乏神”ですよ」

「負けた人はトップの人に”キッスのごほうび”ってのはどうDa  
い？」

(∴!! あいつ!! 勝手にルール増やすんじゃない!!)

しかし、天国は勝負は現地についてからだと言いついて聞かせてなんとか  
怒りを沈めた

そんな感じに全員がはしゃいでいる中……

牛尾、蛇神、猪里など何人かは羊谷の考えに感づいてる者もいた

この合宿が、レギュラーを決めるための戦場だと言うことが

AM 9:00 伊豆に到着

そのまま宿に直行の手はずだった

老舗旅館 しにせ 温泉 おいしい料理 枕投げ

だが一行を待っていたのは……

「さ、着いたぞ」

羊谷がそう言って立ち止まった場所は深い山の中だった

当然、部員達は戸惑う

「え!?!?ここ…?!?ここって何処なんスか!?!?」

「宿は!?!?宿はどこに!?!?」

すると羊谷は今立っている地面を指差して笑いながら答えた

「宿……?!?ここだよ、こ・こ」



#### 4 発目 ゆかいな合宿（後書き）

野球くえすちょん！　答え・解説

灘

「さて、このコーナーも二回目ですが……早速行きます！！」

凜

「野球はまず最初打席に入って右打者と左打者の真ん中にある『ホームベース』があるのじゃが……」

「ともかくそれをアウトにならないように一塁、二塁、三塁と踏んでホームベースを踏んだり触ったりして、『セーフ』になればこれで一点になるのじゃ」

灘

「だけど、相手も一点をやらないように守ってきますから……結局一点を取るためには日ごろの努力！努力！努力！が必須条件となります！！！」

凜

「それでは、『置き捨てられた』次回の部員達の運命を絶対に見るんじゃぞ」

灘

「いやあの……置き捨てられたとか止めてくれませんか……？」





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1834s/>

---

食いたい時、飲みたい時

2011年10月8日17時22分発行